



みこころ



■発行所／〒860-0079 熊本市西区上熊本2丁目11-24 TEL (096) 352-7181 FAX (096) 352-7184



病院創設135周年 ホスピス30周年挨拶	2
木村病院長・シスター泉 記念対談	4
みこころ院内マップ	6
病院の外壁が新しくなりました！	7
パストラルケアって何？	9
新しい先生のご紹介・スタッフの趣味のススメ	11
スタッフ押し！お店紹介	12
2024年度病院実績	13
編集後記	14



◆ 基本理念 キリストの教えに根差して
身体と心と魂の安らぎを目指します

当院の医療・介護・福祉サービスは、宗教や社会的な背景を問わず、全ての方にご利用いただけます。

<https://www.mikokorohp.com/>



祝 病院創設 135 周年 ホスピス 30 周年挨拶

イエズスの聖心病院は、2024 年に病院設立 135 年、ホスピス 30 周年という節目の年を迎えました。今回、2025 年に当院の壁面工事が完了したことに伴い、2024 年発行予定であった記念誌と 2025 年の広報誌を合併し、特別記念号として発行いたしました。

病院長

木村 哲也



イエズスの聖心病院は、1989 年に設立されました。当時熊本に来訪したシスターが、地域の中で病気を患っている方、貧しい方へ支援したことが設立のきっかけとなっています。1993 年よりホスピスケアに取り組み、1994 年に熊本県で初めてホスピスを開設しました。

2004 年に現在地に移転し、2023 年 2 月には医療療養病棟を介護医療院に転換したことから、熊本県で唯一のホスピス単科の病院となりました。

病院のあり方や職員も変わっていく中で、当院は 2024 年に病院設立 135 年、ホスピス設立 30 年を無事に迎えることができました。これだけの年月を重ねてくることができたのも、地域の方々やボランティア、医療機関、介護施設など、様々な方が当院を支えてくださったからこそ、と感謝しております。キリストの教えに根ざして一人ひとりを大切にする、みこころらしい医療、介護を次につなげていくために、今、当院とつながり、支えてくださっている全ての方を大切にしていきたいと考えています。これからもご支援の程、よろしくお願ひ申し上げます。

パストラルケア部

若松 真紀



イエズスの聖心病院は、135 周年を迎えました。当院が熊本の地で地域の方たちと共に歩んで来ることができたのは、多くの方たちの人生の中に、聖心病院での出会いが刻まれてきたからではないでしょうか。病院は、病と向き合う場であるだけではなく、人と人とが出会う場、心と心が通い合う場でもあるからです。そういった出会いの場としても、当院は存在しているのだと思います。

135 年前に来熊したシスターたちは、言葉も通じず、偏見や誤解など多くの困難の中で活動していました。しかし、社会の中で小さくされていた病人や子供たちに対する「一人ひとりを大切にする」シスターたちの姿勢や、全身全霊で相手に向き合う真心や愛は、出会いの中で伝わり、次第に地域の人々に受け入れられました。時代が変わり、人が代わっても、大切にそれらは引き継がれて、現在に至るのです。

これからもイエズスの聖心病院が、神から与えられたいのちを大切にしながら、喜びやしあわせを味わうことができる出会いの場となることを願っています。

看護部長 緒方 恵



1889年、4人の修道女達が来熊して露天生活者患者への施療活動を開始しました。1895年、施療施設無料診療所を新設し、行き場を失っていた人々に、身体を休められる場所と医療・看護の手を差伸べました。これが、当院の始まりです。1993年6床のホスピス病棟を開設し、先駆者として緩和ケアを展開しました。

私達の先輩方は援助を必要とする人々を優先して、その命に奉仕することを第一の目的としました。それは「ありのままの一人ひとりを受け入れ、その存在を尊び、愛する心を大切にする」ことを原点としています。私達は、これを「みこころらしさ」と呼んでいます。「みこころらしさ」は、私達の真心であり誇りです。創立から135年が経過しても、その思いは職員に伝わっています。

私達は全人的視点を持って、患者さんの人生観や価値観、思いに寄り添いながら、「患者さんやご家族にとっての最良」をともに考え、その人らしく生きることを支える看護・介護の提供を目指して進んでいます。これからもよろしくお願ひ致します。

事務部長 岩下 秀一



イエズスの聖心病院は、135年前4名のシスターが慈愛の精神のもと熊本の地で医療的弱者や子供の支援を中心に活動を開始しました。その後、医療施設として時代と地域のニーズに即して変遷を重ね、1994年熊本県で初めてホスピス病棟を開設し現在に至ります。ホスピスは、家庭的な環境下でその人らしい人生を過ごしていただく医療施設として欧州で発祥しました。当院はご存じのとおりカトリック系の修道院が経営母体であり、現在も2名の看護師の資格を所持したシスターがパストラルケア部に所属して活躍しています。パストラルケアの主な活動内容は、病気等で不安を抱える患者さんの心のケア、ご家族のグリーフケア、それとホスピス病棟に欠かせないボランティアのコーディネーターを担い、ボランティアさんも含めた多職種で患者さん、ご家族に寄り添っています。

私事になりますが、知り合いのお父様が入院されたとき、「こんなに優しい病院は初めてです」、「私が病気になつたら、是非入院させてください」、「聖心病院で診て頂いてよかったです」との言葉を頂きました。勿論良いことばかりではないですが、職員にとっては何ともありがたい言葉を頂き感動しましたし、職員の仕事ぶりが評価されたことを大変うれしく思いました。まさしく当院が目指すべき姿だと思っています。これからも、先輩方が築かれた病院の土台を更に進化させ、一人でも多くの方に「ここに来てよかったです」と言っていただける病院づくりを目指していく所存です。



「みこころホスピスのこれから」



病院長

木村 哲也

2009 年 イエズスの聖心病院入職。
2016 年 11 月より現職。



パストラルケア部顧問

Sr.泉 キリエ

1991 年 イエズスの聖心病院入職。
2024 年 4 月より現職。

● 創立当時について

Sr.泉：1889 年 11 月 1 日が聖心病院創立の日ですね。1877 年に「ショファイユの幼きイエズス修道会」のシスターたちが宣教のため日本に来て、それから 10 数年後に熊本に入ったと聞いています。そこで、病を患いながら生活されていた方と出会い、救済に着手したのが始まりでした。当時は慈恵病院のシスターたちと一緒に生活しながら、彼女たちが島崎で、私たちの修道会が上林で、病を患っている方を看に行っていたそうです。

院長：慈恵病院のシスター方と一つの所に住まわれていたということは、初めて知りました。当時は、本妙寺の周りに病を患った方が

仏様の救いを求めて集まられていたそうですね。

Sr.泉：そうみたいです。当時を知っていた方から、シスター方がお母さんと一緒に一銭玉を渡して周っていた、というお話を伺ったことがあります。

● ホスピス立ち上げの経緯

院長：みこころホスピスは 1994 年に届出が受理され、そこから数えて 30 年という区切りを迎えるました。シスターはいつ頃からホスピスに取り組まれたのでしょうか。

Sr.泉：当時聖心病院の建物は老朽化しており、私たちの理念に沿う療養環境には程遠い状態でした。そのため、私たちは色々な病院や教会へ相談にまわりました。そこでは一様に、「“ホスピス”をするのが良い」ということを言われました。ホスピスのことはデーケン先生^{*1}の記事がカトリックの季刊誌によく出ていたので、私も頭の片隅にはありました。

その後、ある神父様を訪ねた時に、「ホスピスであれば井田くん^{*2}がいるが、今の聖心病院には来ないだろうな」と言われたのです。その時、私は井田先生のことは存じ上げませんでした。ところが、その一週間後のことでした。教会に熊本信愛女学院を卒業した信徒さんが来ていたのですが、隣に立っている男性を指して「主人の井田です」と紹介されるじゃないですか。それが、井田栄一先生だったのです。

井田先生は、「聖心病院を見学させてください」と仰ってくださいました。井田先生は、その当時福岡の病院に勤めておられましたが、もともと熊本出身であり、熊本に帰りたいとの思いもおありの様子でした。井田先生とはそんな不思議な出会い方でしたが、その後、ホスピスの立ち上げに協力していただけました。

ホスピスへの理解を深めるため、私は国立医療・病院管理研究所^{*3}に一年間行きました。そこで様々な病院を見学し、ホスピスを中心としたレポートを出しました。最後の日、研究所の玄関で指導教官から、「泉さん、あなた



— 135 年の歩み —

1889 年（明治 22 年）11 月 1 日
来熊した修道女 4 名が孤児
養育・病者訪問開始

1890 年（明治 23 年）
訪問看護奉仕開始

1895 年（明治 28 年）
上林に無料診療所開設

1909 年（明治 42 年）
診療所を「聖心（せいしん）
医院」と名称変更

1961 年（昭和 36 年）
「イエズスの聖心（みこころ）
病院」と名称変更

1967 年（昭和 42 年）
ベッド 87 床へ増床

1993 年（平成 5 年）
みこころホスピス 6 床開設

1994 年（平成 6 年）11 月 1 日
熊本県で初めて緩和ケア病棟
届出が受理され、ホスピス病棟
15 床開設

2004 年（平成 16 年）4 月 1 日
上林から上熊本（現在地）へ
新築移転

2017 年（平成 29 年）3 月 1 日
ホスピス病棟 37 床へ変更

2023 年（令和 5 年）2 月 1 日
みこころ介護医療院開設

*2 井田栄一医師 現・熊本ホー
ムケアクリニック 院長

*3 病院管理に携わる職員に対し教育、
研修を行うための専門機関。現在の
国立保健医療科学院

のレポートは皆から高く評価されましたよ」との言葉をもらい、飛び上がって喜びました。以来、「ホスピス、ホスピス！」という思いで一杯になりました。

しかし、病院に帰ってホスピスのことを話すすぎていたのでしょうか。当時の院長から、「あれ(シスター泉)が帰ってきてから病院がガタガタする」と言われてしまいました。病院を混乱させるために来たのではないのに、と落ち込みもしました。

そのようなこともあり、私は病院での勤務を断ろうと思うまでになりました。その時、一人の若いシスターが、「私たちを置いていかないで」と言ったのです。その言葉を気にしながらも、私は默想会の日に澤田神父様^{*4}のところへ「断りたい」という気持ちを話しに行ったのです。ところが、神父様は「修道会から派遣されて行き、嫁舅に虐められて出戻る、それがあなたの修道生活なのか。もしそのシスターの言葉が、幼きイエス様の言葉だったらどうする？」と言われました。私はその言葉を聞いて、「ああ、参った」と感じました。そして、その場ですぐに「聖心病院に帰ります！」と言いました。そんな神父様の言葉に励まされて、現在に至っています。

その後、新しく院長として来られた田代先生^{*5}が、ホスピス開設を許可してくださったのです。そして、2階の6床から始めることになりました。

● 「優しさ」は鏡

Sr.泉：忘れられない患者さんがいます。「ここには死ぬためにきました。誰にも面会したくない」と仰っていた方です。しかし翌朝になると、「気持ちが変わりました。今朝まで8人の看護師さんが来ましたが、みな同じように優しかったからです」とのことでした。ちょうど新しい病院の建設途中だったこともあり、彼女の夫は「新しい病院の特室に行くまで頑張ってほしい」と、そんな新しい夢まで持っていました。その夢を叶え——そして旅立っていかれました。

院長：思い出深い方ですね。今でも共通しているのが、「看護師さんが優しい」というお言葉をいただくことですね。何が看護師さんを「優しく」させていると思われますか。

Sr.泉：その人が人生を振り返り話す時、その人の思いをイメージしながら思いを込めて「聴く」こと。先生が患者さんのそばに座り、その人と同じ目線で傾きながら聞きいっていらっしゃる。その姿勢が、患者さんが「優しい」と感じるのではないかでしょうか。

院長：そうですね。私は、自分も含めて、聖心病院のスタッフは怒りもするし悲しみもある、「普通」の人であると思います。では、そんな「普通」の人が、病院の中で患者さんに「優しい」と感じてもらえるようなことが出来るのは何故か？——そう考えたときに、「患者さん、ご家族が優しいから、鏡のように私たちも

優しくできる」のではないかと思うのです。私が聖心病院に入ってちょうど15年になります。その中で、「患者さん、ご家族が私たちを優しくさせてくれている」ということに思い至りました。

● みこころホスピスのあり方

Sr.泉：「患者さん、家族が主役」ということを忘れないでほしいと思います。例え自分の仕事が遅れても、「今は忙しい」と言わないような関わりかな。井田先生は、「五感に触れる」関わりが終末期のケアだと仰っています。

院長：「五感に触れる」というのはとても大事なやり方だと思います。今、「先生はパソコンばかり見ている」ということが当たり前のように言われていますよね。聖心病院では、患者さんや家族と向き合う時間があります。手を触れ、ゆっくり話をすることが出来る、それがあるからこそ聖心病院だと思います。

Sr.泉：私は、ホスピス立ち上げの時に井田先生たちと作った理念、「みこころホスピスとは、人生の終末期を迎えた人たちがその人らしい生を完成させるための援助プログラムです。身体と心と魂の安らぎを目指します」——この言葉を、今もずっと噛みしめています。

院長：「患者さん、ご家族が中心」というのは変わらない、変えてはいけないところだと思います。そして、一番は「優しい」と感じてもら

れる対応をすること。この135年、先輩方が積み上げ、つないできたものがあるからこそ、今それができているのだと思います。これをきちんと次に伝えていくことも、私たちの大切な役割だと思っています。

みこころ院内 MAP



6 チャペル吹き抜け

2階の廊下には、チャペルを見下ろすことができる小さなスペースがあります。この特等席に座って静かな時間を楽しんでみてはいかがでしょうか。



7 ステンドグラス

1階ホスピスから2階研修センターへ上がる階段部分には、美しいステンドグラスが設置されています。描かれている「蝶・薔薇・虹・空」はそれぞれ意味を持ち、ホスピス全体を表しています。

「蝶」は、身体を離れ天国へ旅立つ魂を

「蝶を育て天翔けさせる薔薇」は、愛を

「虹」は、天国への橋を

「青空」は、天国をイメージしています。



3 1階病棟の中庭

一階ホスピスのお部屋や廊下からは中庭を眺めることができます。バラ・アジサイ・サクラ・フジ・ブドウ・ウメ…五感で楽しめる季節の花木を、ボランティアスタッフが大切に育てています。



4 喫茶コーナー

ご希望の方には、ボランティアスタッフがお茶やコーヒーをサービスします。2階や3階にもお持ちしますので、お気軽にお申し付けください。



5 チャペル

祈りの場所です。いつでも、どなたでも訪ねることができます。



9 屋上のキリスト像

晴れた日は、病院の外からでもお顔が綺麗に見えます。



1 玄関のキリスト像

正面玄関スロープのそばには、キリスト像があります。当院が上林町に建っていたころからあり、「みこころの像」として正面玄関の真横に設置されていました。



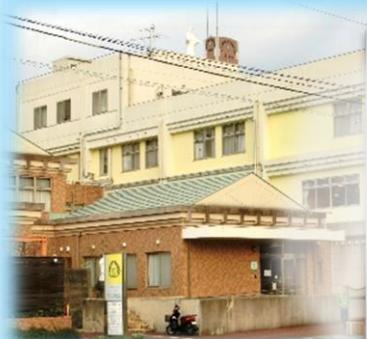
2 図書コーナー

貸出希望の方は貸出ノートにご記入ください。貸出期間は2週間です。読み終わった本は返却コーナーへお返しください。

病院の外壁が新しくなりました！

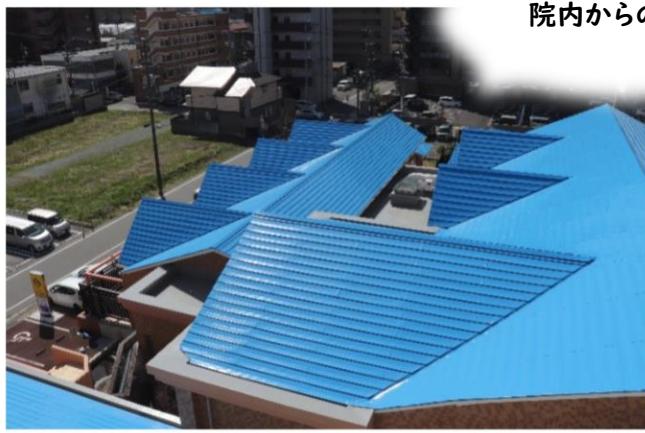
この度、日本財団からの助成を受けて2024年9月から実施していました外壁改修・防水工事が今年の3月に無事完了しました。

経年劣化により色褪せ、ひび割れていた外壁は塗り替えられ、清潔で明るい外観に生まれ変わりました。工事期間中のご協力誠にありがとうございました。



ホスピス病棟の屋根は鮮やかな青色に変わりました。スロープも塗り直され、玄関との繋がりがより分かりやすくなりました。

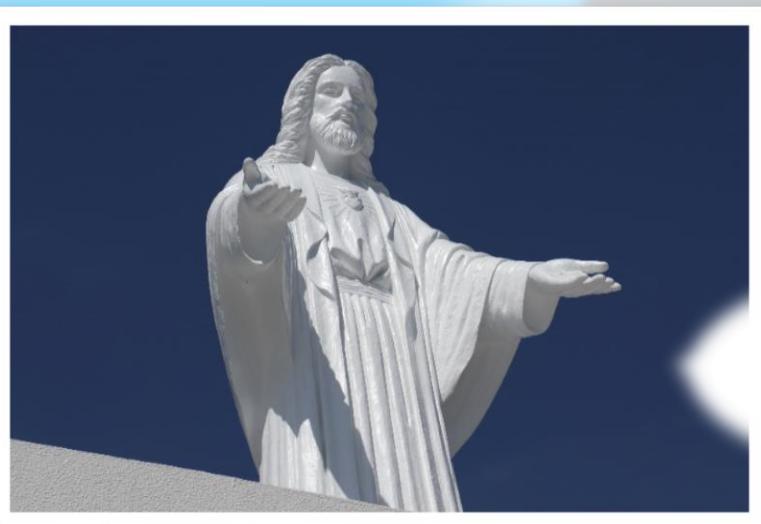
院内からの眺め



1階ホスピス
病棟中庭



みこころデイケア
玄関



屋上のキリスト像

パストラルケアって何？ 実際にお話を聞いてみました

皆さんは、「パストラルケア」という言葉をご存じでしょうか？なかなか聞きなれないという方も多いのではないかと思います。カトリックの病院であるイエズスの聖心病院では、シスターがパストラルケアワーカーとしてケアを行っています。今回は、皆さんにパストラルケアについて知っていただくため、当院のシスターにお話を聞いてみました。

† パストラルケアとは



パストラルケアとは、患者さんやご家族の「心の痛み」のケアです。「パストラル」という言葉は、ラテン語の「パストル（羊飼い）」が語源となっており、羊飼いが時には一匹の羊を命を投げうち救うかのように、親身になって人々をケアするという意味があります。

病気による苦しみの中には、不安感、孤独感や罪悪感、あるいは「なぜ私が病気で苦しむなければならないのか？」という、人生そのものに対して苦悩するような、人間の奥深いレベルにある痛み（スピリチュアルな痛み）があります。パストラルケアワーカーは、そのような痛みに寄り添い、支え、ともに歩みます。

† パストラルケアワーカーの主な仕事

患者訪問・ご家族とのかかわり … お部屋を訪問し、患者さんやご家族の心に寄り添います。時には患者さんの手足をさすってそばにいます。

心の時間 … 毎週金曜日に患者さんやご家族が集まって様々な心のうちを話し、思いを分かち合う会です。（グループケア）。

お別れの会 … 入院・入所中の方が亡くなった（ご帰天された）とき、ご家族とともにチャペルで讃美歌を歌い、故人のそばで分かち合いをします。その後のご遺族のケア（グリーフケア）に繋げていくことを目的としています。



家族会・慰靈祭 … 当院でご帰天された方々のご遺族をお招きし、職員とともに思い出を振り返りながら自由に語り合っていただく会です。



ボランティアコーディネーター … ボランティアスタッフと病院とを結びつける役割です。当院には約 100 名のボランティアスタッフが在籍しています。

宗教的なかかわり

▶ミサの準備 チャペルにて月に1回、カトリック司祭によってミサが行われます。ミサとは、「最後の晩餐」を記念した感謝の祭儀で、聖書の朗読や、讃美歌や祈りなどを行います。

▶聖体奉仕 司祭やシスターが定期的に信者のものを訪問し、キリストの血肉の象徴であるパンとブドウ酒を分かつ儀式です。

▶教会（チャプレン）との連絡、協力 信者が入院した際の教会との橋渡しや、改宗希望があった場合の入信儀式（洗礼）の準備等を行います。



† パストラルケアワーカーの顧問であるシスター泉にお話をうかがいました。

Q1. 患者さんと接するときに気を付けていることなどありますか？

——患者さんと同じ目線に立ち、五感の全てを使ってお話を「きく」ことを大切にしています。パストラルケアでは、その人にしか歩めない人生を受け入れ、「あなたはあなたのままでいい」ということを自他ともに認めあうことを目的としています。パストラルケアとは、人生の意味を知るための関わりとも言えますね。

Q2. パストラルケアを行うなかで、やりがいを感じた所はどんなところでしょうか？

——患者さんが誰かと比較せずに自分の人生をふり返って語られ、自分の人生に「OK(これで良かった)」と言ってくださったときです。もちろん、患者さんが人生を肯定できなくても、私たちはその人を受け入れ、いつまでも友だちであり続けます。

Q3. 自分自身を認め、受け入れるために必要なものとは何でしょうか？

——「自分は愛され、受け入れられている」という思いです。私の場合は、家族に大切にされたという記憶が、いまの自分を受け入れる土台になっていると思います。私の祖父は、よく「大きくなれよ」と頭を撫でてくれましたし、祖母は近所の人に「この子の親のおかげで大変なことは何もない」と話していました。「息子たちのおかげ」ではなく、わざわざ私を輪に入れて「この子の親のおかげ」と言ってもらえたことが嬉しかったのをよく覚えています。また、私がシスター養成学校にいたころに「神さまは、人が耐えられない苦しみは与えない」という言葉を母からもらいました。この言葉は、今も私を励まし支え続けています。

Q4. パストラルケアワーカーになるためにはどうしたらしいですか？宗教職でなければなることはできないのですか？

——パストラルケアワーカーに興味があれば、ぜひ『臨床パストラルケア教育研究会』について調べてみてください。私はそこが主催する研修会に参加したり、イギリスやフランスなど様々な国を訪問し、海外での実施例を学んだりしました。

パストラルケアワーカーになるには、宗教職でなければいけないということはありません。ただ、パストラルケアワーカーに宗教職の方がいらっしゃるのは事実です。人は「死」という現実に必ず出会います。しかし、宗教職の方は「死で全てが終わるということはない」ということを信じています。それがパストラルケアワーカーに宗教職の方がいらっしゃる理由の一つだと言えるでしょう。

† パストラルケアワーカーの関わりについて

～ 患者家族の声 ～ (J-HOPE5 遺族調査アンケート自由回答欄より抜粋)

- ▶ 「…とても悲しくつらい気持ちでいっぱいになり入院1日目に家族のそばで泣いていると、シスターが『よく1人で、ここまで頑張りましたね』と声をかけていただき肩をもんでくださいました。その言葉で、自分で頑張れる所まで頑張ったんだと気持ちが少し楽になりました。」
- ▶ 「…シスターに見守られて、足をさすっていただいた父は、感化され、死の間際、5日前にクリスチャンの洗礼を受けました。その時に私はホスピスという場所は、身体や精神だけではなく、魂もケアしていく可能性のある場所なのだと確信しました。心から感謝しています。」
- ▶ 「…亡くなる当日、声が出なくなった母に、シスターが『悔いのない素晴らしい人生でしたね！』と言われ、母が大きな声で『はい！』と返事をしました。出せない声を振り絞って『はい！』と言えたことは、母にとっても家族にとっても、とてもありがたいことでした。」

新しい先生のご紹介



わたなべ けんじ
渡邊 健司 先生

大阪生まれ、大阪育ちで熊本大学進学を機に熊本に参りました。これまで外科医として、また研究者としてがんと向き合ってまいりました。現在は緩和医療に従事しがん患者さんとそのご家族が病院でも、またご自宅でも変わらず穏やかに過ごせることを最優先にお手伝いさせて頂いております。サポートしてくださる方々とのチームでの医療を心がけて日々の診療に臨んでおります。趣味の写真は新しいレンズが増えるばかりで一向に技術が伴いません。どうぞよろしくお願ひします。

■診療科目

- ・ 内科
- ・ 緩和ケア内科

■所属学会等

- 日本外科学会
- 日本癌学会
- 日本遺伝性腫瘍学会
- 医学博士

1995年3月 熊本大学 医学部医学科 卒業

4月 熊本大学医学部附属病院 第一外科 入局 研修医

1996年4月 熊本県国民健康保険植木町立病院、外科医員

1999年4月 熊本大学医学部大学院 博士課程

2003年4月 熊本大学発生医学研究センター 研究員

2005年4月 熊本大学発生医学研究センター 助教

2008年11月 デンマーク がん研究所(Danish Cancer Society)研究員

2019年1月 がん研究会 がん研究所 特任研究員

2024年6月 現職

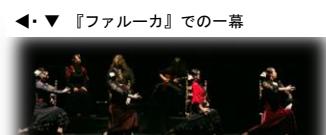
スタッフの趣味のススメ

『人生の中で趣味は3つ持っていたほうがいい』。

20年以上前に患者さまから教えていただいた言葉です。1つは動ける時の趣味、2つ目は動けなくなった時の趣味、3つ目はベッド上でできる趣味。趣味もなく時間に追われるような日々を過ごしていた私の心に、その時の患者さまのご様子と併せて染み入り、ともしうのように残りました。



▲ みんなで“ole(オレ)”！



◀・▼『ファルーカ』での一幕

◀

『グアヒーラ』での一幕

40歳を過ぎ、まだ1つ目の趣味もなく、これから私が自由に身体を動かせる時間はそう長くないと一大決心して始めたフラメンコ。気づけば10年以上過ぎました。その魅力はたくさんありますが、私の中での一番は、音と自分に集中できる時間です。音楽(歌、ギター)と踊りの三位一体で思いを伝える面白さも、最近ようやく感じるようになりました。

でも理想とする踊りから我が身は程遠く。後から始めた子供たちがいつの間にか上達して、そのカッコいい踊りを觀ることの方が楽しみとなってきています。2つ目の趣味への移行も考えながら、あともう少し。この時間を大事に味わいたいと思います。【宮川】

スタッフ一押し！聖心病院周辺の美味しいお店



上熊本駅のすぐ近くにて 140 年続く老舗の宿。
2022 年リニューアルオープンをされており、アットホームなお宿 & 食事処。
女将さんが手間ひまをかけて作る創作料理はどれを食べても絶品！熊本の旬の味覚を味わうことが出来るお店。食事は要予約ですが、ちょい飲みプランやコース料理、宴会にも対応されています。お弁当やオードブルなどもオススメ！一度ご賞味ください。



宿屋 福栄 (やどや ふくえい)

熊本県熊本市西区京町本丁3-32
TEL 096-324-2981

前年度病院実績

ホスピスの受け入れ状況について

当院には2病棟37床の緩和ケア病棟があり、県内で最多のベッド数を擁しています。入院の申込（ホスピス医師との面談）をしていただき、その後はご希望によりベッドを調整します。

面談、入院とともに、待機期間なく希望される時にご利用いただけるようになりました。

最近1年の申込後、入院までの平均待機期間は5日となっています。急を要する時には申込の翌日に入院していただくこともあります。

2024年	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
待機期間	5.3日	5.2日	5.1日	5.4日	5.4日	5.2日	5.2日	4.5日	4.5日	4.7日	4.7日	4.6日

■地域連携室の実績

	連携先からの紹介件数	面談件数
2023年度	314件	296件
2024年度	639件	301件

訪問診療の状況について

当院では「機能強化型在宅療養支援病院（連携型）」指定「在宅緩和ケア充実病院」認定を受けており、自宅で療養・緩和ケアを受けたい患者さんのための体制を整えております。通院が困難な患者さんで、継続した治療、医療管理が必要な方、在宅での療養を希望されるすべての患者さんが対象です。

当院の訪問診療では、在宅酸素、がんの痛みのコントロール等、入院中とほぼ同じ医療管理処置が可能です。自院にて病床管理を行っているため、入院が必要な場合、速やかに入院ができ、病状が改善、安定すれば迅速に在宅療養復帰も可能です。

■在宅療養支援の実績

	訪問診療 往診総件数	看取り件数
2022年度	782件	52件
2023年度	784件	29件
2024年度	1041件	40件

訪問診療を強化したこと
で、ますます在宅での
療養を選択していただき
やすくなりました。

■訪問診療・往診の件数

	定期的に訪問	2022年度	2023年度	2024年度
訪問診療	定期的に訪問	639件	685件	875件
往診	標準時間内	92件	76件	110件
	夜間（18時～22時、6時～8時）	15件	8件	19件
	深夜（22時～6時）	28件	9件	21件
	休日（日曜日及び国民の祝日）	8件	6件	12件

かかりつけのクリニックや病院、在宅医師、地域の訪問看護ステーション、
居宅介護支援事業所や訪問調剤薬局などと連携して在宅医療をささえます。

編集後記

病院設立 135 周年・ホスピス 30 周年の記念合併号として発行した今回の広報誌「みこころ」ですが、なんとこちらも「第 50 号」という節目に相応しい号数となりました。

病院長とシスターの記念対談記事を作成するにあたっては、シスター泉から病院設立当時の貴重なお話や、印象的な患者さんのエピソードをたくさん伺うことができました。紙面の都合で泣く泣く削った部分も多くありましたので、またどこかでご紹介させていただければと思っています。

最後になりましたが、記念号の発行にあたり取材・執筆にご協力いただいた皆様、本当にありがとうございました。

【広報係 小西・奥村】



お問い合わせ先

【地域連携室】 Tel. 096-352-7181

Fax. 096-352-7184